

## 住民参加型まちづくり

日本の都市計画は明治時代、そして戦後と、経済や効率を重視し、道路、河川、大規模開発など、広域的視点からインフラを中心進められてきました。それは確かに今の日本の豊かな経済的発展と繁栄をもたらし、私たちの生活水準を高めてきました。しかしその一方で、コミュニティの崩壊、東京への一局集中、地域文化や歴史遺産の喪失、自然破壊や公害の発生など、様々な都市問題や社会のひずみを引き起こしてきました。さらに、近年では、高齢社会への急速な進行、経済や環境問題に地球的視野から取り組む必要性、また行財政の不調など、行政だけで達成をすることが難しくなっており、市民ひとりひとりの自主的な行動と連携した、市民と行政とのパートナーシップによる新しい地域づくりの必要性が求められています。つまり、これからの環境問題や社会問題に取り組むには、ハード面の整備だけでは不十分であり、人の意識や行動、そして地域社会のあり方などソフト面も含めたアプローチが必要となります。そのために、住民参加は不可欠なものであります。

私たちの研究室では、住民参加まちづくりが実現できるために、効果的で合理的な合意形成手法の検討を行っています。合意形成の方法は主に①メディア活用型：情報媒体による参加・・・間接参加。②体験型：社会実験やイベントによる現地体験への参加・・・直接参加。③討論型：委員会やワークショップ等合意形成の場への参加・・・直接参加、以上の3つとなっています。

以下に昨年度に行った体験型の交通まちづくり社会実験の研究を紹介します。

### ■トランジットモール社会実験

トランジットモールは、公共交通機関（バス、路面電車、LRT、タクシー等）に開放されている歩行者専用道路（歩行者ゾーン）です。自家用自動車などの通行を制限する一方で公共交通の利便性を高め、中心市街地を活性化させる施策の一つとして設けられています。中心市街地における諸問題の解決策の一つとして、欧米諸国ではトランジットモールが導入されています。トランジットモール導入により中心市街地への人々の回帰が見られる等、数多くの成功事例が報告されています。

そのトランジットモール交通計画は宇都宮で取り入れることが可能かを検討するにあたって、市民に体験してもらうために社会実験を行いました。実施期間は平成18年11月4日・5日の2日間、「大通りにぎわいまつり」と称し実施されました。トランジットモール実施区間は大通りの約500m区間でした。

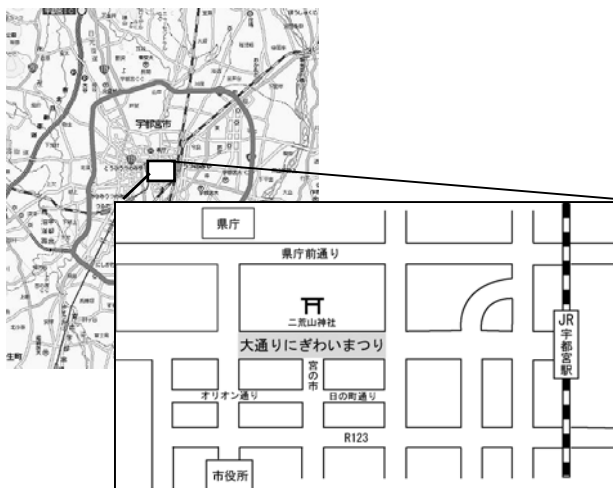


図-1 トランジットモール社会実験の実施区間



図-2 トランジットモール社会実験の様子

今回の実験では、歩行者量の増加やにぎわい創出の効果を得るとともに、自動車から公共交通への転換の可能性が示されました。社会実験の継続・中心市街地活性化の課題として、市民、商店主、交通事業者の間で中心市街地における交通のあり方の意識に差が生じていることが明らかとなりました。そのため、中心市街地活性化に向けて、交通のあり方に対する意識をまとめていくことが必要です。